

# 現代フランス語の「複合過去形」の考察(1)

青木三郎

## はじめに

現代フランス語の「複合過去形」(以下「複過」と略す<sup>1)</sup>)が、過去を表すテンスとしての側面と「完了」を表すアスペクトの側面を有することは、よく知られた事実である。この二つの側面をどのように関係づければよいか、という問題に関してフランス語学の中では長い議論の歴史があるが、未だ定説が確立していない...といっても決して過言ではない。私見を提出する前に、一度、どのような議論が過去に展開され、今後いかなる方向へ研究が向かうのか、また向かうべきであるかを考えておくのも無益なことではないであろう。本稿ではこのような問題意識に支えられつつ、「複過」の研究史を整理しておこうと思う。

さて「複過」の捉え方は、大別すれば、過去説、完了説、過去・完了一義説の三つに分けることができる。「過去説」の代表は「複過」を過去時制の一つとして捉える立場であり、多くの伝統文法はこの立場をとっている。「複過」を過去時制の一つとして捉える根拠は、この時制が形態的に見かけは複合形であるが、助動詞と過去分詞(以下「過分」と略す)に自立した機能を認めず、実際には一つの形態であるという考え方である。それに対して「完了説」の代表は、「複過」を単純時制である「現在形」の複合形と捉え、その対立を時制ではなくアスペクト価(完了/未完了)に求める立場である。この立場をつとに積極的に主張したのは G. Guillaume (1929) であろう。さらに後に川本茂雄 (1954), J. Perrot (1956), P. Imbs (1960) などが「複過」の価値を助動詞と「過分」の機能の複合体として論じることになる。第三の「過去・完了一義説」は、「複過」の多様な用法を一つの統一的な機能によって説明しようというもので、この際、基本的な機能が「過去」を表すことなのか、「完了」を表すことなのか、それとも「過去」「完了」を共通の括弧でくくることのできる機能

なのかが問題となる。例えば R. Martin (1971) は明確に意味の潜在レベルに統一的な「複過」のシェームを見だし、「過去」「完了」を文脈上に顕在化した結果的な意味であると説いている。同様に「複過」の統一的な形式化を試みた研究に L. Waugh (1987), J. J. Franckel (1989) などが挙げられよう。

この三区別は無論極めて図式的に過ぎ、実際には長い研究の流れの中で、三説を整然と区別することは困難な場合が多いことも認めなければならない。時代により言語の認識論的背景が異なることを考慮にいれないわけにはゆかない。また研究の目的や問題意識についても、専ら記述を中心とした研究と理論的考察、あるいは積極的なモデルの構築を目指した研究、あるいはまた語学教育を意識した研究で異なることは明白である。そして研究者の資質・気質によっても、同質の内容が相当に異なった表現で語られることもある。従って「過去」や「完了」という用語についても必ずしも文献によって同じ内容であるとは限らない。以下では過去の主だった学説をできるだけ原文に沿いながら解釈してゆきたいと思う。

## 1. 過去説

### 1.1. 伝統的記述 : *Grammaire des grammaires* (1840)

過去の多くの規範文法において「複過」を過去時制の一つとして見なす考え方が一般的である。しかし過去時制としての「複過」の用法を如何に記述しているかという点についてみると、文法書によって必ずしも同じではない。例えば、Ch. P. Girault-Duvivier (1840): *Grammaire des grammaires ou analyse raisonnée des meilleurs traités sur la langue française*, tome second, Paris, A. Cotelle, neuvième édition を覗くと次のような記述を見いだす。

Le *préterit indéfini* marque une chose faite dans un temps entièrement passé, que l'on ne désigne pas, ou dans un temps passé désigné, mais qui n'est pas encore entièrement écoulé. Ainsi, quand je dis : *Les fruits de la terre ONT ÉTÉ la première nourriture des hommes*, je ne désigne pas positivement le temps où cela est arrivé. Mais si je dis : *J'AI EU la fièvre cette année, ce printemps, ce mois-ci, cette semaine, aujourd'hui*, je désigne à la vérité des temps, mais ce ne sont pas des temps absolument passés, et il en reste encore quelques parties à écouler. En français le *préterit défini* et le *préterit indéfini* ne s'emploient pas

indifféremment l'un pour l'autre. On ne doit pas se servir du *prétérit défini* que pour exprimer un temps absolument écoulé, et qui sont éloigné au moins d'un jour de celui où l'on parle. Ainsi vous ne direz pas: **IL FIT un très-grand froid CETTE SEMAINE, CE MOIS, CETTE ANNÉE,** etc., parce que cette semaine, ce mois, cette année ne sont pas tout-à-fait écoulés: ni: **JE REÇUS CE MATIN la visite de madame votre mère,** parce que *ce matin* fait partie du jour où l'on est encore. Mais vous direz fort bien: **J'ALLAI HIER au théâtre Français.- JE PASSAI tout l'été DERNIER à la campagne.** [ ... ]

On se sert au contraire du *prétérit indéfini* en parlant d'un temps passé qui n'est pas entièrement écoulé: *j'ai écrit CE MATIN, AUJOURD'HUI, CETTE SEMAINE;* etc., ou dans un temps totalement écoulé, mais dont on ne précise pas l'époque: *Troie A ÉTÉ DÉTRUITE par les Grecs.*- Cependant, dans ce dernier cas, l'usage permet d'employer le *prétérit défini*, et de dire: *Troie FUT DÉTRUITE par les Grecs.*

(*ibid.*, pp.748-749)

Prétérit indéfini (ここで言う「複過」)は過去に成された事柄(chose faite dans un passé)を表すと明確に説明されているが、ここで言う過去には現在から見て完全に過ぎ去った場合と、まだ現在において完全に過ぎ去っていない場合とがある。前者の場合には *prétérit défini* を用いることもできる。この説明はほとんどそのまま Grevisse (1969): *Le bon usage-Grammaire française avec des remarques sur la langue française d'aujourd'hui*, 9e édition, Gembloux, Duculot にまで踏襲されていると言ってよい。

Le passé composé (passé indéfini) indique un fait achevé à une époque déterminée ou indéterminée du passé et que l'on considère comme étant en contact avec le présent, soit que ce fait ait eu lieu dans une période de temps non encore entièrement écoulée ou que ses conséquences soient envisagées dans le présent. (*ibid.*, § 721, p.673)

## 1. 2. Brunot (1926) と Gougenheim (1939)

過去と完了の関係がこの種の規範文法では不問であり、関心はむしろ過去時

制として *passé défini* (ここで言う「単過」) との相違を論じることにある<sup>3</sup>。過去と完了の関係が不問であるのは、それ以前の文法記述を質量ともに刷新した Ferdinand Brunot (1926): *La pensée et la langue - Méthode, principes et plan d'une théorie nouvelle du langage appliquée au français*, 2e édition, Paris, Masson et C<sup>ie</sup> においても同様である。ただし Brunot は明確に「複過」の完了の用法と、過去の用法を記述している。「複過」は *présent parfait* つまり *l'état présent résultant de l'accomplissement d'une action passée* (p. 458) を表す形式であり、また (*passé récent* に対して) *passé ordinaire* を表す形式なのである。Brunot には「複過」の理論という発想はない。Brunot の基本的な考えでは、表現と言語形式の間に一対一の対応関係は存在せず、われわれは一つの表現に対して複数の言語形式を有することができるし、また反対に一つの言語形式が複数の表現価値を持ちうるのである。例えば、動詞の命令形は「命令」を表すのみならず、忠告、依頼、嘆願、それに仮定(条件)を表すこともできる。反対に「命令」は未来形や法助動詞(*voulez-vous.?*)、そして独立句 *debout! en avant!* などでも表しうるのである。このような考え方から「複過」を見れば「過去説」も「完了説」もさほど重要な案件ではないことが理解されよう。重要なことは同一の形式が「完了」と「過去」を表すという事実である。Brunot の弟子である Gougenheim (1939): *Système grammatical de la langue française*, Paris, D'Arthey (特に 206 頁以下 *Les oppositions temporelles* の章を参照) の記述においても、基本的には「複過」は過去時制の一つである。この規範文法は方法論的に音韻論において成功を取めた弁別的対比を文法に応用するという野心的な試みであるが、「複過」に関しては、形態論の章 (*chapitre V*, pp. 95-96) で複合時制として単純時制との対比を問題にしてはいるものの、統辭的には過去時制として「単過」との対比でしか論じられていない。しかも現代語の「単過」は一部を除いて口語から消滅してしまっているので、正しく「単過」と「複過」の対比的価値を理解するためには古典時代のフランス語に遡ってその対比を見る必要があると説く。Gougenheim によれば「単過」と対比される「複過」の用法には二つある。一つは「単過」が遠い過去 *passé lointain* を表すのに対して、「複過」は近い過去 *passé récent* をあらわすという用法であり、もう一つは「単過」が完全に完了した過去の行為を表すのに対して (例 *La semaine passée je lus*)、「複過」はまだ続行中の期間において起こった行為を表す (例 *Cette semaine j'ai lu*) というものである。この説明は、注 (1) に挙げた Sensine や Buffin の説明に比べて、決して進歩したものとは言えないのではないと思われる。

Buffin はつとに「複過」と「単過」の相違を話し手の記憶、経験と結合しているかどうかを求め、主観的過去か客観的過去かを事例に即して説得的に説明しているが、Gougenheim は「単過」と「複過」を「遠い・近い」「現在と関係する・無関係である」にしか関与的な弁別の特徴を求めている。Gougenheim は「複過」と「単過」を対立させるために現代語から離れて、*récit*において二時制の競合していた16-17世紀のフランス語を対象とし、現代語にもほぼ同様の対立が存在すると説く<sup>4</sup>。しかし現代語における「複過」の価値を規定するためには、「複過」との対立が明瞭であった時代のフランス語に遡るのではなく、どのような歴史的経緯によって「複過」が現在のような複雑な用法を持つに至ったかを説明しなくてはならないだろう。(Schogt (1964), *Le Guern* (1986)を参照。後述。)

### 1. 3. Wartburg & Zumthor (1947)

「複過」の過去説を主張し、完了の用法を過去の用法と関連づけて説明しているのは W. von Wartburg & P. Zumthor (1947); *Précis de syntaxe du français contemporain*, Berne, A. Francke である。Wartburg & Zumthor は過去時制として単純形:「半過」「単過」、複合形:「複過」「前過」「大過」、および複合形に対応する複複合形(具体例なし)を挙げる。過去時制の基本的な相関関係は「単過」「半過」「複過」の対立によって成り立っている。この三時制は共に過去を表す点で共通しているが、その表し方に相違があるのである。「単過」は客観的に過去を述べ、他の事象と明瞭な観念の結合がない。「複過」は過去の事象を現在における何らかの事象と結合させる、主観的な時制である<sup>5</sup>。「半過」は客観的に過去の事象を他の過去事象と結合させる時制である。なお、現代フランス語の口語では「単過」が体系からはみだしているので、「半過」・「複過」が客観的過去・主観的過去の相関関係を表しているとする。こうした時制の考え方は、例えば P. Imbs の研究などにもそのまま受け入れられていることは周知のとおりである。さて Wartburg & Zumthor の「複過」の用法の説明は極めて明瞭である。

Le passé indéfini (ou passé composé) – Ce temps, formé à l'aide du présent de l'un des auxiliaires *avoir* ou *être* (...) marque essentiellement le passé dans la mesure où il comporte pour le présent une conséquence quelconque relativement au sujet de l'action, ou un intérêt encore actuel.

(*ibid.*, p. 214)

Wartburg & Zumthor にとって「複過」の本質は行為が過去であり、行為の主体が現在において何らかの関係を有しているのである。現在との多様な関わり方にこそ「複過」の用法の多様性が存するというわけである。彼らは次の三種に分けて論じている。

(a) 発話の現在においてまだ完全に問題となる期間が終了していない過去の行為を表す：

例 *il est venu déjà deux fois aujourd'hui* ;

(b) 現在の事態に対して、それを引き起こした原因として過去の行為を捉える：

例 *je suis obligé de lui téléphoner : il n'est pas encore venu* ;

(c) 過去の行為が現在の事態を引き起こしているという判断 (b の用法) から、過去の行為を完了相 *aspect de l'accompli* として捉える。(ただし例文は一つも挙げられていない。)

ここに来て「過去説」による「複過」の用法の説明がはじめて明示的に、そして有機的に行なわれえたとと言えるのではないかと思われる。

#### 1. 4. Sten (1952) の時制研究

Wartburg & Zumthor 以後の研究で「過去説」により「複過」の用法の多様性を整合的に解釈した最も重要な研究は H. Sten (1952): *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, København, E. Munksgaard である (ただし Sten は Wartburg & Zumthor を文献には挙げていない)。Sten は時制の体系的記述が目的ではなく、専ら単純時制と複合時制の用法を記述した研究であるが、「複過」の章において、「複過」を独立した「過去時制」として認めるべきなのか、それとも「現在形」の複合形として考えるべきなのかをきちんと論じている。結論として Sten は「過去説」を採用が、慎重な「過去説」であるといえる。「複過」が過去を表す根拠は、*Vous avez dit que j'étais là?* (*ibid.*, p. 184) のように従属文節において時制の一致があり、*avez dit* を過去と捉えていること、そして口語において「単過」が「複過」に置き変わっていることを挙げている。つまり L. Foulet の主張とは反対に *prétérit* が消滅したのではなく、「複過」

の用法において)「parfait が死んだ」(ibid., p.184), という解釈である。そのことを踏まえた上で, Sten はしかし「複過」を「過去時制」と見做すことに条件をつけるのである。

Le passé composé peut bien se considérer comme un temps du passé. Il s'agit d'actions passées. (...) Mais puisque ce temps est formé à l'aide d'un présent (*d'avoir ou d'être*) il devrait participer de l'actualité aussi. (ibid., pp.184-185)

「複過」は確かに過去の時制と見做すことができる。過ぎ去った行為が問題となるのである。しかし avoir / être の現在形とともに構成された時制である以上, アクチュアリティに参与しなければならないのである。Sten の論述は上述のように体系的な理論に基づくものではなく, 記述的であることを志向しているので, 「複過」の考え方も事象の記述の全体を通じてしか推測できない。Sten は現在時制とともに用いられる「複過」は現在時に対して antériorité および simultanéité を表すことを指摘する。(例 *Les armes qui nous ont manqués rajustent leur tir* (Saint-Exupéry, *Pilote* 165, p.185) さらに話し手が過去の行為と現在との関係を強調したい場合, つまり過去の行為を現在に結び付けて記述をする場合には「複過」が用いられ (例 *César a latinisé la Gaule*), 過去の行為を現在とは切り離して, 過去に定位することが好ましい場合には「単過」が用いられるとする (例 *l'an 60 César fut élu consul*)。Sten は「単過」と競合して過去を表す「複過」に関して “On voit de combien de façons on peut rattacher le passé au présent” (p.187) と述べているが, 卓見である。上記の例でいえば, *César a latinisé la Gaule* は *La Gaule a été latinisée par César* と同義であり, *La Gaule* は (名称は変わってしまったものの) 現在にまで存在し続けている。またナポレオンが1799年に *je veux être consul; c'est un assez beau titre. César l'a été* と言ったとしたら, ナポレオンの意識の中では発話時に César のイメージが現存するのである。Sten の「複過」の記述を総合して推測してみると, Sten は「複過」の表す「過去の行為」(actions passées) を, 現在形との関係で捉えれば, つまり現在形を基本にしてその視点から捉えれば, antériorité-simultanéité の解釈になり, かつての行為を現在時に (現在形ではない) つなぎ直せば「単過」と競合する「複過」の解釈になる, と考えているように思われる。

このように同じ「過去説」ではあるが, Sten は現在とのつながりという点に

おいて Wartburg & Zumthor とは異なった考え方をしているように思われる。現在の視点から過去の行為を捉えるということは Wartburg & Zumthor も Sten も同様に考えているが、Sten は現在の状態から見て過去の先行性を問題にする場合に「完了」の解釈がなされ、過去の行為を再び話者の現在に(心理的に?) 結び直す場合に「過去」になるという二段構えの考え方をする。実例に即した説明としては Sten の方が説得性が高いように思われる。

### 1. 5. Imbs (1960) の研究

Sten 以降の研究でまとまったものとしては P. Imbs (1960): *L'emploi des temps verbaux en français moderne - Essai de grammaire descriptive*, Paris, Klincksieck を無視するわけにはゆかないであろう。Imbs の時制研究は Sten と同様に、原則として記述的であること、伝統文法に沿うことを方針としている。

Partant des formes, nous analyserons les *emplois*, en suivant de très près la grammaire traditionnelle, corrigée par les résultats des enquêtes récentes et une réflexion grammaticale tenant compte de l'état présent de la linguistique générale; ce point de départ empirique permettra de faire droit, dans une très large mesure, aux nécessités de l'enseignement, qui ne peut pas pas rester largement empirique. (*ibid.*, p.11)

Imbs は「複過」を「過去時制」と「完了」の曖昧な形態 *forme ambiguë* として扱う。“Le *passé composé*, en tant que composé d'un auxiliaire au présent et d'un participe marquant l'accompli, a une position ambiguë” (p.100) というのが Imbs の立場である。複合形として「複過」は *accompli* を表すが、時制としては単純形の「半過」「単過」と並んで「過去時制」として扱われる。これは上述の Wartburg & Zumthor などの伝統的な考え方と同質である。ただし Imbs はこの三時制の相違をアスペクトの相違に求めている。「半過」は未完了相 *imperfectif* であり、「単過」は完了・点括相 *perfectif-ponctuel* である。「複過」は動作が完了を越えて、発話時の話し手の眼前に現われる様を表す。従って動作は完全に過去のものとして終了しているのであるが、話し手の思考においては現に存在するのである?

ところで Imbs の「複過」の用法の記述はほとんど用法の羅列であり、用法間の有機的な相関関係は積極的には示唆されていない。「完了」*accompli* は Imbs



によれば現代語では稀な用法であり、たかだか *dire* (*j'ai dit*), *vivre* (*elle a vécu*), *mourir* (*elle est morte*) の「複過」にしか存在しない。ほかに *accompli* の解釈を受けるのは *passé gnominique* (例 *Un malheur est vite arrivé.* p.101) や前未来の価値で用いられる場合 (*J'ai fini dans un instant.* p.101) などであり、また時に *nuance de résultat ou de situation acquis dans le présent* をともなうことが指摘される。(例 *Pierrot est venu le voir hier au soir... -Je suppose que du coup vous avez décidé [=«c'est une chose définitivement décidée»] que c'est lui qui l'a tué?* p.101 など)。これはあくまで (Imbs の用語に従えば) *nuance* なのである。

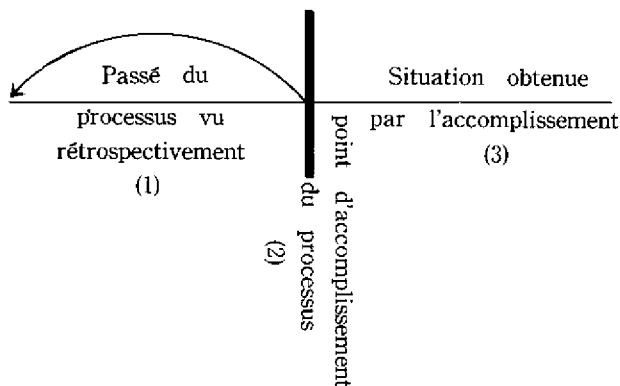
さらに「複過」の「過去」と「完了」の二重性により、現在時から見た *antériorité* をが表される。Dès qu'il a disparu, le visage de Médée s'anime や Il y a 6 ans qu'il est parti などの用法である。また「複過」は口語における語りの時制として用いられる。またこの過去時制としての用法は文語にもはいるこみ、そこで「単過」との競合が問題になるのである。

Imbs の「複過」の記述にはとりわけ新しいものはなく、記述に徹するならば「複過」のとりまく環境—副詞句との共起、動詞の語彙的アスペクトとの制約等—を広く観察した方がよかったことは言うまでもない。

しかし Imbs は過去時制の複合形を論じる別章において、「複過」を助動詞 *avoir* (*être*) と「過分」の機能に分解して分析している。俄かに Imbs の論述は理論的になる。「複過」の、そして一般に動詞複合形の完了は「過分」が担う表現機能である。Imbs は「過分」の表す完了を次の三点において捉えている。

- (1) 完了相は動詞の表す過程の完了によって得られる状況 *situation obtenue par le complet achèvement du processus exprimé par le verbe* から成り立つ。
- (2) その状況は動作の完了と原因・結果の関係によって結びついている。つまり動作の完了なしには完了の状況は存在しえないのである。動作が過ぎ去ったものであることは、それが完全に既然であるにも関わらず、完了の状況が喚起するものの中に含まれている。しかし動作が過ぎ去ったことは、完了した点から遡って眺められているのであり、動作の展開に沿って眺められているのではない。
- (3) 動作の完了点は動作の出口 *sortie* に位置するものであり、この完了点こそが助動詞の意味と時制によって時間軸上の限定をうけるのである。

Imbs は完了のシュマを次のように図示する。



さらに Imbs は助動詞 (avoir/être) の役割を以下のように複合的に捉える。

- (1) 助動詞 être/avoir はそれ自体の性質により、完了事行が主語(主体)の存在に関わるものとして見るか(例 *je suis venu*)、あるいは対象または事行そのものに影響を与えるものとして見るか(例 *j'ai compris l'affaire; j'ai marché*)を表す。
- (2) 助動詞は時制を担う形態として、完了点が現在・過去・未来のどこに位置するかを表す。
- (3) 助動詞は単純時制であり、単純時制もまたアスペクトを表す機能がある。助動詞は「過分」の表す完了アスペクトの内部において、「完了アスペクト」に包みこまれる形で持続相 (*duratif*)、反復相 (*itératif*)、未完遂相 (*imperfectif*)、完遂相 (*perfectif*) などを表す。

Imbs が「複過」を過去時制と捉えるのは、単なる解釈上の問題ではなく、基本的には助動詞が現在形であり、「過分」が事行の完了時点を遡及的に現在よりも以前の時点として表すという仕組みを考えているのであると思われる。「現在から見て既然の事行」というのが「複過」の過去説なのである。その他、Imbs は先行性 *antériorité* についても言及する。単純時制で表される事行があり、それに対して完了を示す場合は、完了事行は単純時制の事行に対する先行性を表すと説明する。従って先行性という関係時制 *temps relatif* としての「複過」は完了から直接に派生したものと言える。

以上が Imbs の「複過」論の概要である。一方において「複過」の記述を行ない、一そして記述においては Sten より優れていると言いがたい、他方において理論的に「複過」の曖昧性を助動詞 avoir/être の三重性格一本動詞としての語彙的性格・現在時制・アスペクトの多様性一と「過分」の完了アスペクトの二つの要素の複合体として解釈する。その解釈は評価すべきことである。ただし「複過」の用法の記述では「過去時制説」を採り、複合時制の理論考察は別章だてで「完了説」を採っているので、理論と記述が乖離してしまっていると言わざるをえない。そこに Imbs の限界を認めざるをえないのである。

## 2. 完了説をめぐる

Imbs の研究は 60 年代初頭に出版されたものであるが、先行研究を振り返ってみると 50 年代に実に盛んに時制が議論されていることに気がつく。上述の Sten (1952) を始めとして、日本での研究も合わせると、主なものとして川本茂雄 (1954, 1985 に再録), Cohen (1954), Togeby (1955), Perrot (1956), Garey (1957), 朝倉季雄 (1958, 1988 に再録), Benveniste (1959, 1966 に再録) などが挙げられる<sup>8</sup>。これらの研究は (Cohen のそれを除いて) みな「複過」を過去時制と捉える考え方に批判的である。中でもとりわけ川本 (1954) は Guillaume, Damourette et Pichon などの先駆的業績を十分に咀嚼した上で、「複過」を動詞時制体系の中で明確に「現在時制完了形」*présent parfait* として位置づけている。Perrot も「複過」を動詞時制体系の中で「現在形」であると説き、価値として「現在完了」*accompli présent* を有すると主張する。朝倉は「複過」の実例を入念に吟味して、*antériorité* ではなく、「完了相」が動詞複合形に一貫する本来の価値であると説いている。

以下では「完了説」をめぐる議論について見ておこう。「完了説」は G. Guillaume から始めなければならない。

### 2. 1. G. Guillaume (1929)

Guillaume の理論は均整のとれた建築物のようなもので、その全体を理解しなければ各論は理解できない性質のものであり、またその反対に各論の中に全体を読み取れなければ意味がない。Guillaume は伝統文法のように結果として実現された言語を扱うのではなく、あくまで思考 *pensée* においてどのように築きあげられるかが問題なのである。時制に関しても同様である。まず時制と

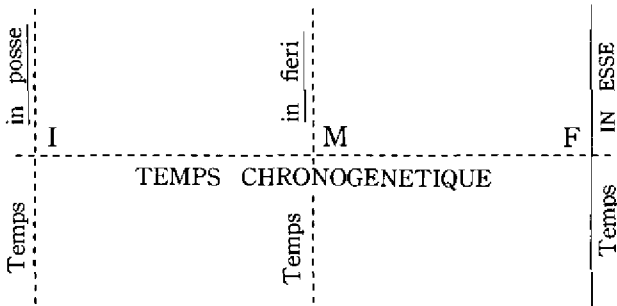
は何かが問われねばならない。Guillaume の形式化は後に様々な言語学者によって批判されることになるが、最も重要なことのひとつはこの Guillaume の言語に対する根源的な視点である<sup>9</sup>。

Mais pour le linguiste, et les fins qu'il poursuit, cette image optima du temps est un instrument insuffisant. Son défaut vient précisément de sa «perfection». Ce qu'elle offre au regard, c'est du temps déjà construit en pensée, si l'on peut s'exprimer ainsi, alors que l'analyse demanderait qu'on vît du temps en train de se construire dans la pensée. Il est concevable, en effet, que pour s'introduire profondément à la connaissance d'un objet, cet objet fût-il le temps, point ne suffit de le considérer à l'état achevé, mais qu'il faut le plus, et surtout, se représenter les états par lesquels il a passé avant d'atteindre sa forme d'achèvement.

Autrement dit, la vue du temps au degré d'achèvement maximum ci-dessus décrit en donne une connaissance extrinsèque, mais pour une connaissance intrinsèque, il importerait de pouvoir suivre pas à pas, en quelque sorte, la genèse de l'image-temps dans la pensée. (*ibid.*, p. 8)

時制<sup>10</sup>は Guillaume にとっては構築されるべきものであるが、その際根底に存在するのが「時間像」 image-temps を形成する心的作用 opération mentale (あるいは思考作用 opération de pensée)である。さらに心的作用が展開するためには現実的に時間が必要である。言語の根底には、いかなる言語においても、思考作用とその展開に必要な時間の存在を必要とする。従って言語を存在せしめる思考作用とその展開の時間は一般言語学な射程を有するのである。その時間の持続は、時間のもつ固有の性質により線状的に表すことができる。この思考作用はこのように時間軸に沿って連続的に展開してゆくが、展開の初期時点 initial, 中間時点 médian そして最終時点 final の三段階においてそれぞれ思考の「時間像」が形成される。初期時点ではまだ思考は展開に至らず、「時間像」は実現しうる潜在的な状態に留まっている (この時点を temps in posse と呼ぶ)。中間時点では思考の「時間像」が形成されつつある (この時点を temps in fieri と呼ぶ)。そして最終時点で「時間像」の形成が完了する。(この時点を temps in esse と呼ぶ)。この潜在的段階 (en puissance) から生成段階 (en devenir) を経て実現 (en réalité) にいたる一連の時間的運動を chronogénèse (「時称形成」<sup>11</sup>)

という。そして時称形成の時間軸上に「時間像」を形成する三時点はそれぞれ *chronothèse* (「時称設定」<sup>12)</sup> の軸を表わす。「時称形成」の時間軸上に「時間像」が形成され、「時称設定」の軸が決定すると、思考作用は「時称設定」の軸から次の軸へ「照準」を変えて移ってゆくことができるようになる。思考作用は思考の潜在レベルの諸段階に「照準」を合わせることで、言語形態を実現化するのである(名詞であれば冠詞が名詞の実現化の機能をもつ)。Guillaumeはこの実現化の作用を「照準」*visée*と呼ぶ。さて、初期時点の時称設定に思考作用の照準が定まると、その時点が実現し、同時に動詞の形態が実現する。初期時点では思考の潜在的な段階における「時間像」が形成されるが、その具体的な言語的实现形態は不定詞と分詞である。さらに思考作用の照準が中間段階に達すると、つまり照準が何らかの思考の妨げによって最終段階の完了した「時間像」に到達しないときは、いわゆる接続法が実現する。そして最後に思考の照準が完結した時間像の時点に到達することによって、直説法が実現する。(下図参照。 *op. cit.*, p. 9)



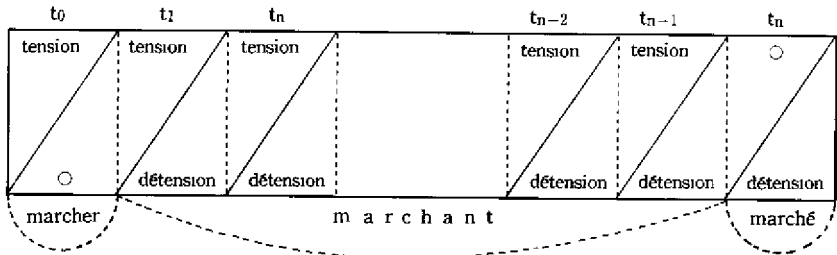
Guillaumeの言語理論では、従って、法 *mode* は話者の言表態度(確定的・不確定的あるいは客観的・主観的など)の問題が本質的なのではなく、あくまでも「時称形成」の時間軸上に展開される思考作用が問題となると言えるであろう。動詞の範疇である法・アスペクト・テンスはいずれも思考作用の「時間」の実現の仕方に相違があるのであり、その思考の時間の動きという点においては等質の扱いが可能なのである。つまり法・アスペクト・テンスの一元論を提唱するのである。

このようにして *mode* の諸形態が実現するが、その次にアスペクトについて見なければならぬ。アスペクトは「時称設定」が *in posse* でも *in fieri* でも

in esse でもアスペクトは問題となりうるが、Guillaume 理論では、本質的に動詞の内部における時間の分析である。marcher という運動概念を例にとると、この動詞の表すイメージは、起点 (A) と終点 (B) の二つの限界点によって捉えることができる。(下図参照)

A ----- B  
marcher

動詞 marcher は A において運動を始め、B において運動を完了する。この運動は抽象的に一種の「張力」 tension として捉えられる。A の時点を  $t_0$  で表すことにすると、 $t_0$  から見た動詞は潜在的に A から B に向かう張力のみを有していると言える。言い換えれば「弛緩」 détension がないということである。この段階の運動をフランス語は不定詞で表す。それに対して、A の位置を離れ、「張力」が B の方向へと向かうと、前方にあっては「張力」があり、過ぎた部分は「弛緩」してゆくという事態が起こる。このように「張力」と「弛緩」が同時に存在するのが、現在分詞 *marchant* である。そして最後に B (この時点を  $t_n$  としよう) に到達することによって運動は「張力」を失い、唯一「弛緩」だけが残る。それは過去分詞 (*marché*) によって表されることになる。(下図参照. *op. cit.*, p.18)



Guillaume はここに至って、理論上やっかいな問題に遭遇する。つまり、最終の位置にある  $t_n$  の扱いについてである。 $t_n$  は運動を完了させる位置であるから動詞の一部として考えられる。しかし同時に  $t_n$  は完全に「張力」が切れ、「弛緩」した状態を表すのであるから、もはや動詞ということとはできない。まさに過去分詞は動詞というよりもはるかに形容詞的なのである。従って  $t_n$  は

位置 position において動詞であり、語の形成 composition において形容詞という二律背反のステータスを有しているといえる。フランス語はこの二律背反の事態を解決するために、完全に弛緩しきった運動に再び「張力」を与える。これが助動詞 avoir の役目である。こうして過去分詞は再び動詞として機能するようになる。avoir はそれ自体に marcher と同様の「張力」を有するので、その運動の位置によって avoir marché/ayant marché/eu marché が形成される。そして最後の eu marché は再び avoir によって「張力」を与えられ、avoir eu marché となる。

こうして運動の「張力」の局面の捉え方により、フランス語では三種のアスペクトが出来上がるのである。

- (1) 「張力」を有したアスペクト (これを aspect tensif と呼ぶ) ;
- (2) 一度「弛緩」した運動に新たに「張力」を与えるアスペクト (これを aspect extensif と呼ぶ) ;
- (3) 再び「張力」を失った(2)の運動に新たに「張力」を与えるアスペクト (これを aspect bi-extensif と呼ぶ)。

具体的にはそれぞれ(1) 動詞単純形(不定詞) marcher ; (2) 助動詞+過去分詞 avoir marché ; (3) 助動詞+助動詞+過去分詞 (avoir eu marché) が相当する。

さて当面の問題である「複過」のアスペクトについて言及するならば、Guillaume 理論では aspect extensif という位置づけができるであろう。では aspect extensif は具体的にはどのような用法を有するのであろうか。extensif は動詞のイメージを展開しつつあるものとして喚起するのではない。既に前もって存在する動作あるいは状態から時間的に継続した、結果的状况(これを séquelle と呼ぶ)を喚起するのである。Guillaume の言うところを引用しておく。

L'aspect extensif, qui comprend les formes verbales de la deuxième série analytique (verbe de forme composée), éveille dans l'esprit non plus le déroulement d'une «séquelle» de cette image, -le mot «séquelle» étant pris ici comme terme général pour désigner n'importe quelle situation résultante susceptible de se déterminer dans la pensée comme site dans le temps d'une action ou d'un état qui a existé antérieurement. (*op.cit.*, p.21)

Guillaume は mettre son chapeau/avoir mis son chapeau/avoir marché の三例を

挙げてアスペクトについて具体的に説明している。mettre son chapeau と言えば、手によって頭の方に向かって行く帽子をイメージするが、avoir mis son chapeau と言えば、頭にかぶった帽子をイメージする。従って mettre son chapeau (単純形) と avoir mis son chapeau (複合形) では意味するところが異なるのである。しかし同じ複合形でも avoir marché では動詞の結果に別の状況が生まれるのではなく、単に marcher という行為が停止したのにすぎない。停止後の時間にはとくに意味がなく、単なる「観察点」 un simple point d'observation となるのである。この「観察点」から見ると動詞のイメージは時間的に前に生じていることが強調されることになる。この動詞の時間的先行性 antériorité の価値が実際にフランス語において広く用いられるようになって、「単過」と「複過」の競合が問題になり、口語では「単過」を駆逐するに至るのである。

ここまで Guillaume の時制論を見てくると、Guillaume の「複過」の考え方は多重であることが理解されよう。「複過」の有するアスペクトは aspect extensif である。つまり動作の運動は完全に「張力」を失って「弛緩」する。そのことにより、動詞のイメージは別のもので変質する。あるいは単なる動作停止の「観察点」となる。「観察点」から見ることにより、動作は antériorité としてイメージされる。そのことにより「複過」と「単過」の競合が現われることが理解されることにもなるのである。

ところで助動詞 avoir はそれ自体動詞と同じ資格で le temps in esse まで到達することができる。le temps in esse の特徴は、le temps in posse 及び le temps in fieri と異なり、「時間像」が明確に過去・現在・未来の三つの時限 époque に分割されることである。三時限の区分は思考内部における現在の実現によって始めて可能となるものである。現在という時限は、一方では絶え間なく過去へと流れ去る時間によって過去時と区別され、他方では、これから流れ来る時間によって未来時と区別される。流れ去る時間は実際に存在した時間であり、従って動詞のイメージが実現されている。これから流れ来る時間は未実現の時間であるから、潜在的にしか規定できない。現在とはまさにこの二つの時間部分の並置によって構成されているのであり、絶えず未実現の時間部分を實現した時間部分に転換する点として理解されるのである。この現在を構成する二種の時間部分を chronotype と呼び、實現した時間部分を  $\omega$ 、未現実の時間部分を  $\alpha$  と表せば、現在は  $\alpha + \omega$  ということになる。

ここで上述の le temps in posse における動詞のイメージの「張力」と「弛緩」と重ね合わせてみると、「張力」は  $\alpha$  に対応し、「弛緩」は  $\omega$  に対応するという



類似が認められるであろう。従って不定詞は「張力」のみを有するので  $\alpha$ 、現在分詞は「張力」と「弛緩」を同時に有するので  $\alpha + \omega$ 、過去分詞は「弛緩」のみなので  $\omega$  で表すことができるようになる。「複過」(j'ai marché) は形態的に不定詞複合形(avoir marché)と対応するが、marché は「弛緩」のみを有するので  $\omega$  であり、avoir は「張力」のみを有するので  $\alpha$  である。この不定詞複合形が le temps in esse に移動すると、 $\alpha + \omega$  の並置は現在を規定することになる。つまり動詞のイメージが完全に「弛緩」しきってしまう時点  $t_n$  において、助動詞 ai (avoir) が「張力」を与えるのであるから、 $t_n$  において  $\alpha + \omega$  が問題となりうるわけである。Guillaume はこの理論の当然の結論として「複過」を時期(époque)としては現在 ( $\alpha + \omega$ ) の aspect extensif として捉えることになるのである。

このように考えることによって、Guillaume は「単過」と「複過」の相違を説明しようとする。「単過」は時限区分としては「過去」であり、そのアスペクトは  $\alpha$  として規定される。Louis XIV régna longtemps en France と言えば、動詞は全面的に展開してゆくが、「弛緩」がないので  $t_n$  に到達することはない。従って動詞の過ぎ去り実現した時間部分は全く無視される。それに対し Louis XIV a longtemps régné en France と言えば動詞は  $t_n$  に到達し、「弛緩」しており、従って動詞の過ぎ去り実現した時間部分が問題にされるので、ルイ14世の支配があって、それが長かったことを述べていることになる。Guillaume の「複過」の考え方はおおよそ以上のごとくである。

Guillaume は徹底して動詞時制(のみならず恐らく言語全般)を体系としてとらえるが、体系化が可能なのは経験的な言語事実(具体的な言語の用法)ではなく、その背後に潜むラングとしての言語である。「複過」に関してのみ言えば、「複過」は体系の一部として「現在時制の aspect extensif」という価値を有するのであって、それが実際の言語使用の現場で「過去」として用いられるか、「完了」として用いられるか、あるいは「先行性」を表すかはラングの段階では体系化するべき性質のものではないのである。

とはいえ、Guillaume は過去分詞を通して  $t_n$  のステータスについて注目し、そこから結果状態(Guillaume のいう séquelle の考え方)、動詞の先行性(point d'observation の考え方)、「単過」との競合( $\alpha/\omega$  の考え方)にまで言及していることは銘記しておかなければならないであろう<sup>13</sup>。Guillaume の研究はほとんど経験的事実には言及せず、ラングという潜在レベルでの体系化に傾いてゆくので、その理論的論究には後年になって無理な部分が多く露呈してくる。しか

しこの理論の後世に与えた影響は甚大であって、Guillaume 理論を基礎にした経験的事実と理論的体系化の試みとして、後に Moignet, Wilmet, Martin などの時制研究が現われることになる。

## 2. 2. Damourette et Pichon (1911-1936)

「複過」のみならずフランス語文法研究において甚大な影響を後世に与えつつけているのは Damourette et Pichon (1911-1936): *Des mots à la pensée — Essai de Grammaire de la Langue Française* である。彼らの文法記述の方法は言語事実から出発して、その背後にある心理的なはたらきを明らかにしようとする大きな試みである。周知のごとく、Guillaume の時制論とは異なり、Damourette et Pichon (以下 D & P と略す) は伝統文法と同様に「法」と「時制」は別の文法範疇として扱っている。動詞の時制はここでは直説法 (le savez, le saviez, le sûtes, l'avez-su, l'eûtes-su, l'aviez-su, le saurez, l'aurez-su, le sauriez, l'auriez su) に限られる。フランス語の時制にとって最も基本となるのは「現在時」の心理上の捉え方である。D & P は心理に現われる「現在時」を次のように説明している。多少長くなるが重要と思われるので引用する。

Rappelons, pour l'intelligibilité de ce qui va suivre, quelques caractères psychologiques du présent. Certes, le présent n'est qu'une perpétuelle mobilité. Mais, comme l'a bien montré M. Pierre Janet, la notion d'un présent absolument *ponctuel*, sans grandeur aucune, pure limite idéale et toujours mobile entre le passé et l'avenir, est une notion abstraite qui ne figure jamais dans notre aperception psychologique réelle du temps. Notre présent a une certaine étendue, il a du dynamisme, de la durée vécue, il s'y passe quelque chose: il est *actuel*. Quant au passé et à l'avenir, ils seront vus de façon tout à fait différente, selon que l'on y concevra que des éléments ponctuels ou qu'on s'y reportera au point de leur prêter une durée vécue, une valeur *actuelle*. (*Ibid.*, p.162)

「現在」の考え方が Guillaume に比べるとそれほど形式化されていないが、ともに心理上に統覚されるべき現在を時制の基本としている点では共通しているように思われる。ただし D & P は「現在」を基準にして問題にしうる最初の区別は、現在から見て行為が以前に起こったか、これから起こるのかという区

別である。即ち行為の先行性/後行性の区別である。これを D & P は *temporanéité* と呼ぶ。現在から見て前に起こった行為であれば *je viens de savoir* か *j'ai su* かを用いる。後に起こる行為であれば *je vais savoir* を用いる。ここで *je viens de savoir* を便宜上議論からはずしてしまうが、結果として「複過」(D & P の *le avez-su*) は現在から見て先に起こった行為を表す。それに対して *je vais faire* はこれから起こる行為を表す。図式的に表すと、*temporanéité* の概念は下図のようになる。

	<i>temporanéité</i>		
<i>antérieur</i>	<i>extemporané</i>	<i>ultérieur</i>	
<i>j'ai fait</i>	<i>je fais</i>	<i>je vais faire</i>	
<i>(je viens de faire)</i>			

時の概念に関わる第二の区別は *actualité* である。*actualité* とは行為の生き生きと躍動する時間のことである。その基本が *moi-ici-maintenant* における *actualité* である。これを *actualité noncale* と呼ぶ。それに対して、*moi-ici-maintenant* 以外の時間(過去・未来)において喚起される *actualité* を *actualité toncale* と呼ぶ。*actualité noncale* を表す時制は *je fais, je ferai, j'ai fait, j'aurai fait* であり、*actualité toncale* を表す時制は *je faisais, je ferais, j'avais fait, j'aurais fait* である。「複過」は従って *noncale* に分類される。

時の概念に関わる第三の区別は *énarration* と D & P が呼ぶところのものである。この概念は Guillaume の言う *époque* に近い。D & P によればこれは心理的に最も「抽象的」であり、主体の情意が介入しない、極めて理知的な時間区分である。*énarration* の概念において心理的時間は現在・過去・未来の三時限に分けられるのである。現在、過去、未来を表す時制はそれぞれ *je fais, je fis, je ferai* である。

以上が D & P の主張する基本的な時間の三概念である。それに対して動詞時制の基本は直説法現在形である。この時制は *actualité* においては *noncale*, *temporanéité* においては *extemporané*, そして *énarration* においては *horain* を表す。他の時制は現在形との関係で規定される。その場合複数の特性において規定される形と単一の特性で規定される場合がある。後者の場合のみを挙げると、*le saviez* は *noncal* との対比のみで *le savez* と区別されるので、これを *toncal pur* と名付ける。*le saurez* は *énarration* において *horain* との対比のみで

区別されるので *futur pur* という。そして *l'avez-su* は *temporanéité* において *le savez* の *extemporané* から区別されるので、*antérieur pur* と規定されるのである。

「複過」は D&P によれば現在時から見て前に起こった行為を表すことが基本というわけである。しかし、それは単に暦の上で、あるいは時間軸上過去に起こった行為というのではないのである。あくまでも重要なことは、それが現在から見て、話し手が *passé-acquêt* と見なすところにある。

Guillaume の理論的考察とは対照的に D&P は歴大な言語事象を観察し、説明原理を求めて行く。D&P の観察は微細にわたっており、これを無視することはできない。D&P の「複過」の用法の記述をここで見ておこう。「複過」の基本的価値は *antérieur*、つまり「現在」から見て先立った行為を表わすことにある。antériorité の典型的な例は、主文が「現」で従属文中が「複過」の場合である。例えば、*Elle est comme ça chaque fois qu'elle n'a pas pris son café* (*op. cit.*, p. 259, § 1758) などである。反対に主文が「複過」で従属文が「現」であることもある。(Comme je pars tard, j'arrive tard. Alors quand j'arrive, elles ont descendu le cahier de rapport. (Mme UJ, le 21 novembre 1933) (*op. cit.*, p. 259, § 1758) など。)

次に、D & P は *antérieur* という特性により、「複過」の *fait accompli* の用法を説明する。彼らの論述は次のとおりである。

La nature réelle de l'antérieur semble devoir être grandement éclairée par l'étude d'un tour très fin qui lui est réservé à l'exclusion du *priscal* [c'est-à-dire *passé simple*, noté par Aoki]. Dans ce tour, l'antérieur exprime un fait que l'on constate *passé sans en avoir consciemment observé le déroulement* : on se trouve en présence du *fait accompli*. (*op. cit.*, p. 261, § 1759)

この文から理解できるように、D & P は「複過」の一用法として「動作の展開をはっきりと自覚して観察することなしに、それが過ぎ去った事象であることを表す」場合があると考えるのである。つまり、その場合は「完了した事象」*un fait accompli* を表すのである。完了には四つのタイプがある。例を挙げる。

- (α) Et si la cité passe des paroles aux gestes, il *a vite fait* d'y ordonner le massacre des habitants. (C. Jullian, *Histoire de la Gaule*, t. VIII, I, 15, p. 69) (*op. cit.*, p. 261, § 1759)
- (β) On habille Toto : en cinq minutes, zeste ! Il *a mis* son gilet, son pantalon, sa veste,  
Et sa petite sœur trouve qu'il est très beau.
- (γ) ... et dans l'ordre moral, qui risque le mal l'*a déjà fait*. (Barbey d'Aurevilly, *Lacordaire*, in Les Œuvres et les Hommes, t. I, p. 258) (*op. cit.*, p. 263, § 1759)
- (δ) Les rayons du soleil de mars étaient si doux, vers midi, qu'il *est sorti* sans autre vêtement que sa courte jaquette grise. Il sent tomber sur ses épaules la fraîcheur acide des premières heures de la nuit parisienne. (A. Flament, *La vie de Manet*, p. 137) (*op. cit.*, p. 263, § 1759)

(α) は婦結節が「複過」-a (vite) fait- におかれているが、それは仮定が与えられると間髪いれずに住民虐殺の命令が下り、それが(まだ実際に実現していなくても)既に完了し、過ぎ去ったものとして認められるからである。この用法においては il a vite fait, elle a tôt fait のように時の副詞が挿入されることが指摘される。

(β) は語り récit の中に現われる「複過」である。この場合、基本となるのは物語の現在形である。「複過」は行為としては「過去」を表すが、「複過」を基本にして語りを進めることはできない。「複過」は語りを進行させる事件に対して、「完了」を表す。D & P は言う。

Il exprime qu'à la fin d'un délai dont la brièveté même a empêché l'observation du développement du phénomène, le phénomène est accompli et, par conséquent, acquis comme élément du passé-magasin : au bout des cinq minutes, c'est un fait acquis que Toto a sur lui son gilet, son pantalon et sa veste ; (*op. cit.*, p. 262, § 1759)

D & P が様々な箇所 で説明している「完了」とは、行為の展開を観察し、完遂にいたる過程を確認するのではなく、基準となる時点から見てすでに行為が過ぎ去ってしまったものであるという確認なのである。

(γ) の用法は (α) に準ずるが、「複過」で表された事象が現在の事象を引き

起こす原因として捉えられている場合である。

(δ)は従属文中に現われる「複過」と似て、主文に対する *antériorité* を表す。つまりここでは *il sent tomber* に対する *antériorité* が問題となるのである。

これら *antérieure* を表す用法が基本となり、いかなる文においても「過去」の事柄を表すことができるようになるのである。しかしその場合でも、常に過去は現在との関係で眺められている。この用法が口語において一般的なのは、D&Pによれば極めて自然なことである。D&Pの言うところは以下のとおりである。

*L'attitude la plus naturelle de l'esprit, est de voir le passé du point de vue du moi-ici-maintenant, c'est-à-dire en rapport avec le présent, d'où l'emploi de l'antérieur. (op. cit., p.265, § 1760)*

以上が極めて大雑把な捉え方ではあるが、D&Pの「複過」に関する考え方のあらましである。まとめると「複過」は独立した時制ではなく、基準となる現在（あるいは現在形の表す基準点）から見て、それ以前に完了した事象を表すということになると思われる。重要なことは、現在形という *temporarité* の関係から見ると、*indifférent* な時制に対して、「複過」はそこからは「異質の」時間を構成しているということである。つまり行為の完了する時点は現在時とは同質ではありえず、その時点において現在とは内容的に異なる時点を設定することになるのである。D&Pはその点を *antérieur* と言っているように思われるのである。

D&Pの考え方と上に見た *Guillaume* のそれとを直接に比較検討することはこの稿の目的ではないが、ともに「複過」を「過去時制」であるという伝統的な考えを拒否し、言語における時間の問題を根源的に解釈しようとする点は共通しているといえる。*Guillaume* は過去分詞の形態分析から出発して *bi-extensif* という規定に至った。*bi-extensif* のアスペクトは動作の内部の時間—つまり「張力」と「弛緩」の問題であった。それに対して *avoir* の問題は現在時との関係で「張力」と「弛緩」の分岐点を位置づけるはたらきがあった。時間的には動作の内部の時間ではなく、現在時との外部的な時間関係が問題になるのである。D&Pの視点は、*moi-ici-maintenant* から出発して「複過」が差異化された時間に位置づけられること、つまり *antériorité* が問題となることを一貫して主張した。

### 2.3. 50年代の研究(1): Perrot, 朝倉, 川本

上述のように50年代には様々な時制研究が発表された。「複過」に関しても様々な見解が出されたが、基本的には Guillaume と D&P の考え方に直接・間接影響されていると言ってよいと思われる。

Perrot (1956) は、形態的に「複過」は現在形であると明確に述べている。そして「助動詞+過去分詞」は現在完了 *présent accompli* の価値を有すると主張する。現在完了とは過去に起きた事件を強く現在に結び付けることである。これを過ぎ去った事件として捉えるかそれとも現在との強い結び付きに注目するかによって、「過去」の解釈と「完了」の解釈ができるのである。従って形態の有する価値 *valeur* は同一であっても、意味 *sens* が異なるというのが「複過」の適切な考え方であるとする。Perrot はラテン語とフランス語の動詞時制体系の総括的な記述が論述の対象なので、「複過」の具体的事象を詳細には観察していないが、「単過」との違いをを特に問題にして、「複過」が現在という *actualité* に対して *acquêt* を構成しなければならないとする D&P の主張を支持している。朝倉 (1958) は Perrot の論文を参照して、二箇所 で引用しているが、主張するところは Perrot によく似ている。朝倉の「複過」の考え方は次の引用に表されている。

「複合過去形は、単純過去形との *nuance* の違いは別としても、まったくの過去時称となったわけではない。〈助動詞の現在形+過去分詞〉というその形態は、現在形が現在を、過去分詞が完了を表わし、全体として現在完了を表すという本来の機能を少しも失ってははいない。

*Je veux tous vous remercier : parce que maintenant j'ai compris.*  
(Beauvoir, *Mandarins*, 418)

では、*maintenant* という副詞が *j'ai compris* の表す時が現在であることを明らかに示している。行為の行なわれた時は現在ではすでに過去になっているが、その結果は現在まで続き、今問題になっているのは「理解している」(*être dans la situation d'avoir compris*) という現在の状態なのである。

完了の結果が現在時において問題にされる場合もあるわけだが、物語体現在などの「複過」は「行為の完了した瞬間を示し、完了した結果である状態の継続の意は一般に含まれない。」(*ibid.*, p.34). 例えば朝倉は D&P の例を引用し、複

合形が単純形に対して *antériorité* を表すとは言えない、と説明する。

On habille Toto : en cinq minutes, zeste ! Il a mis son gilet, son pantalon, sa veste, Et sa ... petite sœur trouve qu'il est très beau.

朝倉は、この例における「複過」は「継起する行為の1つを完了相で表そうという意図による」(ibid., p.34)用法であると説く。朝倉はD&Pの例を引用するだけなのでD&Pの説明をどのように解釈しているのかは明確ではないが、「複過」の実例は *antériorité* だけでは説明がつかず、基本は「完了相」であるという朝倉の主張は、D&Pを批判的に見ているようにも思われる。しかし前節で見たように、D&Pにとっては「完了相」と *antériorité* は矛盾しない概念であって、*antériorité* の一つのケースとして「完了相」を扱っているように考えられる。結局朝倉の「完了相」とD&Pの *antériorité* という考え方は、事実の解釈において同じである、と言うべきであろう。

しかしより重要な問題は、朝倉が「複過」が行為を「完了相で捉える」という際の「完了相」をどのように理解すればよいのか、という問題である。Guillaume はまさにこの「完了相」の言語的意味を厳密に規定しようとしたのではなかったか。この点においては、川本茂雄(1954)がより理論的に「複過」を検討している。川本は「複過」の二重性格にまず注目する。単純時称である「現」に対して、「複過」は時間的には「過去」であり、アスペクト的には「完了」を表すが、「一体この二面的対立のうちでいずれがより根元的のものであるか」(ibid., p.156)を積極的に問うのである。川本の到達する結論は、「複過」は時称形式として根本的に現在時称の1形式であり、アスペクトの観点により単純形と対立する、というものである。これは動詞時制組織全体の中で「複過」を位置づけた明快な結論である。川本はこの結論にいたる過程で、Stenの「過去時制説」を批判し、D&PとGuillaumeを採用する。D&Pの *antériorité* に関しては、これが客観的な「過去」ではないことに注目する。川本は、

「文法上の「現在」とは客観的な、理論的な今という瞬間ではなく、自己が現に直観している等質性の持続だと解釈したい。そして、その等質性の一方の向こうに異質性が意識されるとき、すなわち直観に与えられず記憶に存在するものが意識にのぼるとき、それが「現在」とは別のもの、「過去」として捉えられるとみたいのである。」



(*ibid.*, p. 160)

と文法上の時間概念について述べている。この考えに即してみるならば、過去時制として「単過」は記憶に対応するものであり、

「それに反し、《avez su》は、savoir という生起がすでに行なわれたことを示しながら、しかもその生起を記憶の領域に押しやらずに、その生起した事実の結果・影響を現に直観する等質性・持続性において把えるものである。その意味において *passé composé* は正しくは、*présent parfait* である。それは《savez》が *présent simple* であるのに対すべきものであり、両者そろって *temps présent (grammatical)* をなすと解釈できる。」(*ibid.*, p.160)

ということになる。このように川本は「複過」を「現在完了」を本質的価値と捉えるわけであるが、では「複過」が過去の行為を表すようになるのはいかなる事態によるものなのであろうか。それに関して、川本は次のように説明する。

「現代フランス語の口語において《avez su》が《sûtes》をほとんど駆逐し了せた原因がいずこにあるかは別として、《avez su》が過去の生起を示すのに適した性質を帯びていることは否めない。否むしろ、《avez su》は客観的には過去時の生起であるべきものを、その生起の結果・影響の直観における等質的持続性に視点を移して、主観的に現在化したものとさえ言えそうに感ぜられる。しかし、人間の言語活動が主観性から客観性へと展開してゆく方向をとるものであることを注意するならば、過去時はまず主観的に現在時の一様相として把えられ、それがより客観化されて過去時のものとして解釈される傾向を示しやすいためであると考えることができよう。Damourette-Pichon が《saurez》と《sûtes》を *énarration* なる *répartitoire* に属せしめ、《avez su》を *temporanéité* なる別の *répartitoire* に属せしめ、《avez su》が過去の生起を示すのは現在に対する *passé-acquêt*, *passé-magasin* であって、これに対し《sûtes》は過去時を *intellectuellement* に示すと言っているのは、同種の考え方である。」(*ibid.*, p.161)

川本の意図するところは、「複過」の実例分析・記述ではなく、(それを踏まえた上で)「複過」を動詞の時制体系の中に正当に位置づけることにあった。基本的には先に検討した Guillaume の動詞時制体系と極めて類似したものである。そして D & P の *antériorité* の考えを十分に咀嚼した上での体系化である点において、理論的には極めて堅牢なものであると言えよう。ただし、「完了」から派生的に「過去」を説明する論法は思弁的に過ぎるという批判を避けられないだろう。果たして「過去時はまず主観的に現在の一様相として扱えられ、それがより客観化されて過去時のものとして解釈される傾向がある」ということが、「複過」の過去の用法の説明となるのであろうか。むしろ川本が批判の対象にしていた Sten の説明、即ち過去の事象を現在に *rattacher* し、主観化した場合に「複過」を用いるという説明の方がはるかに無理がないのではないだろうか。

#### 2. 4. 50年代の研究(2): Benveniste (1959)

Benveniste (1959) は現代フランス語の「複過」の価値を (1) *accompli*, (2) *antériorité* (3) *aeoriste du discours* の三つに分類する。(1) *accompli* とは基準となる時点において完了した概念であり、その時間的に完遂した結果生ずるアクチュアルな状況を表す。(例えば *j'ai mangé*; *je n'ai plus faim*. など。) (2) *antériorité* とは対応する単純時制との関係で規定されるものである。単純時制との関係の他に時間性を持つことはできないので、過去などとは全く関係ないのである。(例えば, *quand j'ai mangé, je sors me promener*. など。) この二つの用法は「複過」のみならず、一般的に動詞複合形が単純形に対して有する機能である。従って「単過」(Bのいうアオリスト)にも、その対応する「前過」には *accompli* と *antériorité* の価値が見いだされる。複合形がこの二価値のみを有するというのは、単純形ときれいな対称性をなすフランス語の動詞体系の特徴であるわけだが、実際には「複過」にだけには第三の価値、即ち「過去」を表す用法がある。しかしこの「過去」を表す「複過」には、さらに「超複過」*passé surcomposé* なる複合形が対応し、「複過」に対して *accompli/antériorité* を表す機能を果たしている。ということは「過去」を表す「複過」は形態的には複合形には違いないが、機能的には「現」との対立で機能しているのではなく、それ自体で単純形と同じ資格で機能しているということになる。ではこの「過去」を表す「複過」は何に対立するのか。それは「単過」である。つまり B によれば、発話のプランには二種類 *—récit historique* のプランと *je-tu* を中心

とした *discours* のプランナーがあって、「単過」が *récit historique* におけるアオリスト（不定過去）であり、「複過」が *discours* におけるアオリスト（不定過去）として機能するというわけである。

B の考えによれば、従って、フランス語の動詞時制の体系は二重であり、*discours* における体系と *récit historique* における体系を峻別する必要があるのである。*discours* の中心をなす時制は「現」「末」「複過」であり、それに「半過」「大過」「条件」が属する。しかし決して「単過」は *discours* に属しえない。それに対して *récit historique* の中心は「単過」であり、それに「半過」「大過」「条件」が属する。ここで動詞時制を全体的に論じる余裕はないが、B は「過去」を表す時制として「単過」と「複過」を対称的に見ていると言える。

このように動詞体系を二重構造として捉えることによって、あくまで「現在時制」にこだわり、体系の中で「完了」と「過去」を取めようとした Guillaume や川本よりは、無理なく自然に「複過」の二重性格を理解することができるように思われる。すくなくとも質の異なる二つの発話のプランというものが考えられ、それぞれにおいて動詞の機能が異なるという発想は B 以降の研究においては絶対に無視できない時制の見方である。Weinrich その他多数のテキスト言語学的分析が B 以降に現われることは、周知のとおりである。しかし B の主張がいかに斬新なものにせよ、問題が解決したようには思われない。なぜなら、B は「複過」は一方で「現」と対立し、他方で「単過」と対立するとしているが、果たして「複過」と「単過」は体系として対立しうるのかどうか、疑問の余地があるからである。もし *récit historique* と *discours* の間に対立関係が存在するならば、*discours* における「現」は *récit historique* では何に対応するのか。「現」は今現在の状況を叙述するという意味では、その時の状況を叙述する「半過」と対応するかもしれないが、口語においても人に物語る場合には「現」が現われ、一種の *présent historique* となる。次の例は Culioli (1980) からの借用であるが、口語における「現」の用法がよく現われている。

Hier matin, je *me lève*; je *prépare* mon petit déjeuner en prenant tout mon temps. je *vais* dans la salle de bains: il n'y *avait* pas d'eau. J'*attends*, l'eau *revient*. J'*étais* en train de savonner quand il n'y *a* à nouveau plus d'eau. (*ibid.*, p.188)

このような例を見ると、「単過」と対応しているのは、「複過」ではなく、む

しろ「現」ではないかと思われてくるのである。つまり口語の語りが「現」で、文語の語りが「単過」であるような関係があるのではないだろうか。口語の語りの場合、「複過」を用いることはないようである。よく言われているように、「単過」を「複過」に置き換えてみると、物語の展開にまとまりがなくなり、聞くに堪えない物語になってしまうが、「現」で置き換えてみると、そのようなまとまりの無さは問題とならなくなる。そう考えると、「複過」に対立する「過去」は「単過」ではなく、やはり「複過」の「過去」は discours において特殊な動詞時制と考えざるを得ないのではないか。確かに「完了」から「過去」が派生されるというのは B 自身の説くところでもあるのである。

Pour un locuteur parlant de lui-même, le temps fondamental est le «présent»; tout ce qu'il prend à son compte comme accompli en l'énonçant à la 1re personne du parfait se trouve rejeté inmanquablement dans le passé. A partir de là, l'expression est fixée: pour spécifier le passé subjectif, il suffira d'employer dans le discours la forme d'accompli. Ainsi de la forme de parfait *j'ai lu ce livre*, où *j'ai lu* est un accompli de présent, on glisse à la forme temporelle de passé *j'ai lu ce livre l'année dernière*; *j'ai lu ce livre dès qu'il a paru*. (op. cit., pp.248-249)

## 2. 5. Garey (1957)

50年代の研究の最後に注目しておかなければならないのは、H. B. Garey (1957): «Verbal aspect in French» (*Language*, 33, pp.91-110)の研究である。Garey はフランス語の動詞においてアスペクトをどのように位置づければよいかという問題に取り組み、De Boer, Buffin, Brunot, Damourette & Pichon, Guillaume, Sten といった主な先行研究を検討した上で、フランス語では文法的アスペクトと語彙的アスペクトの組み合わせが文のアスペクトを決定するという主張を行なう。さらに特に Guillaume の時制論を大枠で認めつつも、Guillaume に欠如している重要な分析概念を導入する。つまり発話時点 (Speech moment), 出来事 (Event), そして出来事の指向する時限 (Reference periode) の区別である。この時間論理によれば、R と S の関係が tense (即ち past/present/futur) と規定され、R と E の関係が tempus (即ち anterior/simple/posterior) と規定される。Garey によれば「複過」は anterior present (*ibid.*, p. 103) であり, “the referent periode includes the speech moment, but that E takes place before” (*ibid.*,

p.103)と解釈される。S < R > E とでも表すことができるであろう。Garey は「複過」と「半過」を対比させ、「複過」を「完了テンス」—出来事が指向時限を越えて存在しないようなテンス—とし、「半過」を「未完了テンス」として区別する。この文法的アスペクトの区別の上に、さらに語彙的アスペクトの相違が組み合わされる。語彙的アスペクトは動詞が意味的に目標(ゴール)を有しているか否かにより、telic/atelicに分類されるのである。例えば se noyer, arriver は telic であり, jouer, nager などは atelic と解される。組み合わせとしては、従って、4つの可能性が考えられることになる。(下表参照。)

	imperfective	perfective
telic	Pierre arrivait	Pierre est arrivé
atelic	Pierre jouait	Pierre a joué

Garey のコメントによれば、Pierre arrivait (telic-imperfective) は、過去のある時点 (S > R) において、行為はゴールを目指して進行中であり、ゴールに到達したかどうかは分からない。それはまさしく il se noyait が必ずしも溺死が実現したかどうか不問もであると同様である。第二の場合、Pierre est arrivé (perfective-telic) では、発話時点と同時かそれ以前かにおいて、ピエールが自らの到着を確認していることを表す。第三の Pierre jouait (atelic-imperfectif) では、指向時限において遊戯という行為が存在していたことを表す。その起点と終点は明示されず、単に指向時限の表す期間全体が遊戯で表されているのである。最後の Pierre a joué (perfectif-telic) は行為の展開した時間においてその行為が存在したことを表す。

Garey の研究はフランス語の時制を理解するためには一方では語彙的アスペクト—telic/atelic の考察が不可欠で、他方では時間論理が不可欠であることを明らかにしている。語彙的アスペクトについては、Garey の文献には挙がっていないが同時期の Z. Vendler の問題に通じるところがあり、時間論理の考え方は明らかに Reichenbach の論理の援用であると思われる。

## まとめ

以上で「複過」に関する50年代までの先行研究の検討を終えることにしたい。まとめると、「半過」「単過」と並んで過去時制として「複過」を捉える伝統的

な文法にも様々な考え方が存在すること、「現在完了」あるいは「先行性」を基本的価値とする考え方にも拠って立つ理論は単一ではないことを見てきたことになる。「現在完了」(présent extensif)を主張したGuillaumeは、動詞時制体系を自己完結したシステムと見なし、その中で「複過」を位置づけようとしたのであり、それは川本の研究に引きつがれた。「先行性」を基本的価値としたDamourette et Pichonは動詞時制をやはりシステムと見なしながらも、各時制の対立は三つの分類原理からなると考えた。さらにBenvenisteは動詞時制体系を二重の構造として捉え、複過には「現在完了」と「過去」の二価値があるという考えに至った。それぞれに説得性があることはあり、個別の事象に関する考察にも有意義なものが多いが、実際の「複過」の例文を説明しきるには至っていない。今後Benvenisteの主張する*récit historique*と*discours*の区別を無視できないであろうし、Gareyの主張する動詞の語彙的アスペクトの考察を掘下げることなしに「複過」の正確な理解には至らないであろう。「複過」を捉えるのに、というよりも動詞時制一般に関して、重要なことは、自己完結したシステムの中で時制の価値を決めるにせよ、実際の「複過」の解釈を正しく行なうためには、助動詞avoir/êtreの分析、過去分詞の分析、語彙アスペクト、時間論理、文脈、*typologie des discours*などを重層的に見てゆく必要があるであろう。しかしそのようなモデルを考えるには、さらに三十年以上の研究の積み重ねが必要で、今日に至るのである。

#### 参 考 文 献

- Benveniste, E. 1959 Les relations de temps dans le verbe français, *Bulletin de la Société de Linguistique*, LIV, fasc. I, repris in *Problèmes de linguistique générale*, 1, Gallimard, pp.237-250.
- Buffin, J. -M. 1925 *Remarques sur les Moyens d'expression de la Durée et du Temps en Français*, PUF, 118 p.
- Cohen, M. 1954 *Grammaire et style*, Éditions Sociales, 237 p.
- Culicoli, A. 1980 Valeurs aspectuelles et opérations énonciatives: l'aoristique, David & M, pp.181-193.
- Dauzat, A. (éd) 1935 *Où en sont les Etudes de Français*, Paris, D'Artrey, 344 p.
- David, J. & Martin, R. 1980 *La notion d'aspect*, Klincksieck, 246 p.
- Franckel, J-J. 1989 *Etude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Droz, 472p.
- Garey, HB. 1957 Verbal aspect in French, *Language*, 33, pp.91-110.
- Girault-Duvivier, Ch. P. 1840 : *Grammaire des grammaires ou analyse raisonnée des meilleurs traités sur la langue française*, tome second, Paris, A. Cotelle, 9 e éd.
- Gougenheim, G 1963 *Système grammatical de la langue française*, Paris, d'Artrey.

- Grevisse, M. 1969 *Bon usage* (9 e ed.), Duculot.
- Guillaume, G. 1970 *Temps et verbe—théorie des aspects, des modes et des temps*. H. Champion.
- Imbs, P. 1960 *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Paris, Klincksieck, 269 p.
- Le Guern, M. 1986 Notes sur le verbe français, in Rémi-Giraud (1986), pp. 9-60.
- Martin, R. 1971 *Temps et aspect—Essai sur l'emploi des temps narratifs en moyen français*, Klincksieck, 450 p.
- Meillet, A. 1921 *Linguistique historique et linguistique générale*, Paris, Champion.
- Moignet, G. 1981 *Systématique de la langue française*, Paris, Klincksieck, 346 p.
- Moignet, G. 1980 La théorie psycho-systématique de l'aspect verbal, in David & Martin (1980), pp. 41-49.
- Nyrop, Ch. 1914 *Grammaire historique de la langue française*, vol. VI.
- Perrot, J. 1956 Réflexion sur les systèmes verbaux du latin et du français, *Revue des Langues Romanes*, t. 72, pp.137-169.
- Remi-Giraud 1986 *Sur le verbe*, Presses Universitaires de Lyon, 357p.
- Schogt, HG. 1964 L'aspect verbal en français et l'élimination du passé simple, *Word*, t. 20, pp.1-17.
- Sten, H. 1952 *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Kobenhavn, 264 p.
- Togeby, K. 1955 Les temps du français, *Lingua*, t. 4, pp.379-93.
- Wagner, R. L. 1947 *Introduction à la linguistique française*, Lille, Giard et Genève, Droz, 142 p.
- Wartburg, W. von, & Zumthor, P. 1947 *Précis de syntaxe du français contemporain*, Francke Berne, 400p.
- Waugh, L. 1987 Marking Time with the Passé Composé : Toward a Theory of the Perfect, *Linguisticae Investigationes* XII : 1, 1-48.
- Wilmet, M. 1970 *Le système de l'indicatif en moyen français*, Genève, Droz.
- Wilmet, M. 1976 *Etudes de morpho-syntaxe verbale*, Paris, Klincksieck, pp.208.
- Wilmet, M. 1980 Aspect grammatical, aspect sémantique, aspect lexical : un problème de limite, David & Martin (1980), 51-68
- 朝倉 季雄 1988 『フランス文法論』白水社, 218頁。
- 大久保伸子 1990 「語り手の時制としての単純過去」『茨城大学教養部紀要』22号。
- 川本 茂雄 1985 『言語の構造』白水社, 324頁。
- 古石 篤子 1987 「現代フランス語複合過去形の「曖昧性 (ambiguïté)」について」『流通経済大学論集』22-2, 44-56頁。

## [注]

1. 本稿では次の略語を用いることにする。「現」(現在形), 「半過」(半過去), 「単過」(単純過去), 「大過」(大過去), 「前過」(前過去), 「条」(条件法)。
2. 時制研究に関しての文献としては C. Nyrop (1914-60) : *Grammaire historique de la langue française* VI, A. Dauzat (ed) (1935) : *Où sont les Etudes de Français-Manuel*

*général de la linguistique française moderne*, Parise, D'Artrey, R.L. Wagner (1947) : *Introduction à la linguistique française*, Lille, Librairie Giard & Genève, Librairie Droz, および P. Imbs (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne—Essai de grammaire descriptive*, R. Martin (1971) : *Temps et aspect—essai sur l'emploi des temps narratifs en moyen français*, Paris, Klincksieck などを参照されたい。特に Imbs (ibid) の Notes bibliographiques はフランス語文法史の流れの中で古典的研究と近代の研究を簡潔明瞭にまとめてあるので、必読である。

3. この説明では「複過」と「単過」の相違が明確になることは有り得ない。この点に關しては、Henri Sensine (1896) : *L'emploi des temps en français ou le mécanisme du verbe*, Paris, Payot の説明の方が一步前進しているように思われる。《*Le passé simple, qui exprime un passé absolument séparé du présent de celui qui parle ou écrit, s'emploie exclusivement dans le récit suivi, dans la narration dite historique*》それに対して「複過」は、《*Le passé composé, qui exprime un passé presque toujours rattaché au présent de celui qui parle, s'emploie surtout dans la conversation ou dans toutes les manifestations écrites qu'on peut assimiler à une conversation, notamment dans la correspondance, les sentences, les jugements courts, etc.*》(p.28) という考え方である。これは、さらに Buffin (1925) : *Remarques sur les Moyens d'expression de la Durée et du Temps en Français*, Paris, PUF は「複過」は話者の記憶に主観的に結合してた過去の事態を描くために用いられ、「単過」は客観的に過去を récit désintéressé として語る時制であるという説明に発展してゆく。

4. Dans l'ensemble de la langue écrite moderne se conforme à cet usage, mais avec plus ou moins de bonheur, puisque le sentiment de la valeur propre de chacun de ces emplois s'est affaibli. (*op. cit.* p. 210).

5. La corrélation double, fondamentale, sur laquelle repose le système, est celle qui oppose le passé défini, le passé indéfini et l'imparfait ; réduite à sa valeur essentielle, cette corrélation se ramène ceci : un fait passé étant donné, le passé défini l'énonce, objectivement, sans association d'idées expresses avec d'autres faits ; le passé indéfini associe ce fait avec quelque fait présent, et cette association a un caractère subjectif ; l'imparfait enfin associe le fait, de façon objective, avec un autre fait passé. (*ibid.*, p. 211, § 394)

さらに次の説明が続く。

Mais cette corrélation a cessé d'avoir un plein rendement dans la langue contemporaine : le passé défini est en effet sorti de l'usage parlé ; aussi une nouvelle corrélation tend-elle à se substituer à l'ancienne : imparfait-passé indéfini, c'est-à-dire passé objectif-passé subjectif. (*ibid.*, p. 211 § 394).

6. 川本茂雄 (1954) (1985に再録) で Sten の「過去説」が批判されていることは周知のごとくである。川本は「完了説」(後述) を積極的に主張するが、ここで見たように Sten の「過去説」好意的に観ずるならば、「複過」の多様性は actions passées が現在とどのように関係するかによるかが問題なのであり、しかも Sten は現在形 présent と現在性 (アクチュアリティ) を区別している点など、かなり持論に整合性があるのである。決して、川本の批判するように、「現代口語の現象面に肥われすぎ、

“Le passé composé peut bien se considérer comme un temps du passé”

と結ぶに至っている」(p.152)

というわけではないと思われる。この Sten の引用における bien は「確かに ... だが」の



ように譲歩の解釈をすべきであり、全面的に Sten が「過去説」を主張しているのではないのである。Sten にとって「複過」の基本的価値は“action passée”であり、それが「過去」や「完了」などの現象となって現われると考えるべきである。

7. Cette spécificité est fondamentalement une différence d'aspect. L'imparfait présente le processus verbal comme imperfectif, c'est-à-dire comme se déroulant dans sa durée interne (duratif) ou comme constituant un équivalent de durée externe par sa répétition indéfinie (itératif); il évoque de ce fait un *continu temporel*, auquel s'oppose le *discontinu événementiel* de l'aspect perfectif-punctuel propre au passé simple. Le passé composé représente le processus [sic] dans son au-delà (accompli), tel qu'il apparaît au locuteur, au moment où il l'évoque: il est le passé à la fois *entièrement révolu* (aspect du *parfait*) et encore présent à la pensée de celui qui l'énonce. (*ibid.*, p.105)

8. その他, M. Cornu (1953): *Les formes surcomposées en français*, Berne, Francke, p. 268 (Romanica Helvetica, vol.42), F. Kahn (1954): *Le système des temps de l'indicatif chez un Parisien et chez une Bâloise*, Genève, Droz, p.221 を挙げなければならないが、本稿の執筆時までには参照できなかった。遺憾ながら、本研究の視野には入っていない。

9. Guillaume の時制論に関しては、川本茂雄 (1985) 所取の「時称と時間」に関する一連の論考および同書の木下光一氏による解説を参照されたい。

10. Temps (verbal) の和訳は「時称」と「時制」がある。また鷲尾猛は「時形」を提唱するが、本稿では慣用に従い「時制」を用いる。ただし引用の際は「時称」となることもある。

11. 川本の訳語を踏襲する。(川本, *op. cit.*, p.207)

12. 川本の訳語を踏襲する。(川本, *op. cit.*, p.207 参照。)

13. 大久保伸子 (1990) は Guillaume が「複過」を「過去時制として位置づけず、PR (現在のこと-青木注) の aspect transcendant としてのみ考えていて、二つの PC (「複過」のこと-青木注) の存在 (古石, 1987参照) を認めていないこと (大久保, 注15) を Guillaume の時制論の問題点の一つとして挙げているが、これは Guillaume に対する正当的評価とは言えない。Guillaume はきちんと PC の二価値を論じているのである。